

主 題：満足欠乏症との訣別4

聖書箇所：詩篇23篇

パウロは彼の手紙の中でこのように記しています。「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。:12 私は、貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」（ピリピ4：11-12）と。私たちはこれまで3回に渡って詩篇23篇から、パウロが語っている満足の秘訣を学んできました。それはいったいどういったものなのか？私たちはこの地上で生きている間、さまざまなところで満足を求めて生きようとします。この世の人たちはいろいろなところに満足を捜そうとします。けれども、不安や悲しみを抱きながら、満ち足りることなく、空しさの中で人生を過ごす、そのような人たちが余りにも多いのが現実です。初めのメッセージのときに話した世論調査の結果によれば、日本国民の半数に近い人たちが自分の人生に満足を見い出していないと答えていました。私はこれから良い生活を送ることができると考えている人は10%にも満たない数でした。悪くなっていくと答えた人の方が圧倒的に多かったのです。皆さんはどのように答えるでしょうか？世の人と同じように、私も今ある状況に満足していませんと言うのでしょうか？世の中は厳しい、困難が多いから、とても満足などできないと思っているクリスチャンが残念ながら余りにも多いのです。私には足りないことだらけだと考えている人たちが教会に余りにも多すぎるのです。でも、パウロは言いました。私はどんな境遇にあっても満足を得ることができる、その方法、その秘訣を知っているのだと。クリスチャンは満足をもって生きることができるのです。私たちはその秘訣をダビデのことばを通して、学んでいるのです。詩篇の中でも最も愛されているといっても過言でないこの23篇から、私たちはその秘訣として三つのことを見てきました。

I. 神に焦点を当てること

全地を造られた全能なる方が、私を愛してくださる羊飼いだということ覚えなければならぬのです。主がだれであるのかをよく知らないといけない、そして、その主と個人的な関係、私の、私だけの羊飼いだと断言できるような関係をもっているとはっきり理解するときに、ダビデは一つの結論へと達しました。私には乏しいことはありませんという結論です。私たちが神に焦点を当てて生きるとき、私たちが気付くこと、それは私たちには欠けたところは何一つないということです。満足があるのです。

II. 神の導きに信頼を置く

ダビデは神の導きに関して、2, 3節からいくつかのことを教えました。神は私たちに安息を与えてくださるのだということ、緑の丘で私たちは満足を得るほど食事が与えられ、必要が満たされ、水が与えられ、羊飼いのケアのもとで横たわるのです。人生の様々な問題の中で私たちは疲れ果てますが、神は私に安らぎを与えることができるのだと知るので。そして、3節の初めに「**主は私のたましいを生き返らせ、**」とダビデは言います。神は私たちに回復を与えてくださるのです。私たちがまったく新しい力を得るかのように…。もうこれ以上どうしようもできないとき、神の導きを信頼するがゆえに、神を仰ぎ見ます。そのときに神は私たちに力を与えてくださるのです。私たちの弱さを神の力と交換してくださるのです。そして、神は私たちに義の道を備えてくださる、これは単に正しい道を歩いているだけでなく、神の特徴である正しさを私たちが身につける道でもありました。神はどんなときでも私たちに最善の道へと導いてくださるのです。ですから、私たちは人生においてどのような場面に遭遇したとしても、確信をもつことができます。これは正しい道だ、これは私に必要な道だと。

神の導きに信頼を置くとき、私たちには不満がなくなります。正しい道を歩んでいるから、神がたとえ困難なときであっても、安らぎと回復を与えてくださると分かっているからです。だから、不安になることも、心配することもないのです。

III. 神の守りに信頼を置く

神は私たちを守ってくださるのです。4節を見ると「死の陰の谷」ということばが出てきました。あらゆるわざわいです。人生の暗黒の部分です。けれどもそれが義の道なのです。神が導いておられるから、私たちに必要な道なのです。そして、神がどんなときにも守ってくださっていることを私たちは理解しました。神の守りの中にある三つのことを前回見ました。初めの部分は、神の臨在が私たちに神に守られていることを確信させるということでした。私たちが順調に歩んでいるとき、羊飼いは私たちの前に立って私たちを導いていました。その羊飼いの声を聞いてそれに従って行きました。ところがひと度、角を曲がって暗やみの中に入っていったときに、私たちは怖くなって足がすくむことがあるかもしれません。そのとき神は私の横にいてくださるのだとダビデは教えました。二番目にダビデは「あなた

のむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」と言います。羊飼いはこん棒で敵を追い払い、杖によって羊である私たちの必要を満たしケアしてくださるのです。すばらしいケアが神によって与えられているゆえに、私たちは神の守りを確信することができるのです。三番目に、羊飼いと羊の比喩を終えて、今度は家に客を招き入れる主人と客の関係を表わしました。家に招き入れられた客人はその主人によって確かな守りが与えられることを、ロトの話を通して見ました。神が私たちをその家に招き入れるとき、たとえどのような敵が私たちを追っていたとしても神は安全、安心を与えると誓ってくださることをダビデはよく知っていたのです。ですから、みことばは**「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえる」**とあります。神は私たちのために宴を設けてくださり、そこで宣言されます。「あなたは私の客であるから私があなたの安全を保証しよう」と。

そして4番目です。ダビデは私たちが神の守りに信頼できるその理由の第4をこのように言います。

4. 神のあふれるばかりの恵みが与えられていること

ダビデは言います。**「私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。」**と。私たちが主の家に招き入れられるとき、神は最高のものをあふれるばかりに与えてくださるのです。この「油」または「香油」といったものは、祝いのおき、喜びを表わす象徴として使われました。ここで使われている「油をそそぐ」ということばは、預言者がイスラエルの王を定めるときの油そそぎとは違うことばです。シャワーを浴びたときにリフレッシュするような新鮮な気分、そのような意味のことばです。つまり、香油がそそがれてすばらしい香りが与えられ、安らぎが備えられたことがよく分かるので、体がリフレッシュする、それがあふれるばかりにそそがれることをここで表わしているのです。主人が客にいかにもすばらしいことをしてくださっているのかを表現するのです。「あふれる杯」、それも同じ意味です。神のあふれるケアの象徴です。家の中の最高のものをもって客人をもてなす主人のように、私たちの杯に必要なものをなみなみと注いでくださるのです。満足、安心を表現します。5節の後半に目を留めなければなりません。動詞の形が変わるのです。1－5節の前半までは現在のことから未来にかけてのことを表わすことばが使われていましたが、5節の後半部分は過去のことも含むことばが使われているのです。ダビデは言うのです。神は私たちにすばらしい宴を用意してくださっているが、そこに着く前にもうすでに私はこんなすばらしい祝福を受けているのです、と。そして、それは継続的に私に与えられるのだと言います。ダビデは客と主人の比喩をもって、神のもてなし、守りのすばらしさを強調したかったのです。神の家に迎え入れられた私たちには溢れるばかりの祝福が与えられているのです。それをもう私は体験していると言います。私たちもそうです。イエス・キリストからもっともすばらしい祝福を受けているのです。救いというすばらしいものを。だから、それ以外のあらゆるものは与えられて当然なのです。パウロは言います。ローマ8：32 **「私たちすべてのために、ご自分の御子をさき惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありますまいしょう。」** 私たちに最高のものを与えてくださった神は出し惜しみすることなどありません。残念ながら、私たちはともすれば神はケチだと思ってしまう。他の人と比較して、どうして神は私を祝福してくださらないのだろうとひがんだりします。しかし、神は常に最善です。神がすばらしいとすることと私たちのそれとは違うのです。私たちは自分にとって何がすばらしいのか、何が必要なのかをよく知らないのです。これから先どのようになるのか私たちには分からないからです。神は私たちを満ち溢れるようにしたいと望んでおられます。神の恵みによって。神の御翼のもとに身を避けるなら神は助けしてくださるのです。神は私たちの盾、とりでです。もうだめだと思ふときにも、神の守りがあることに信頼して勇気づけられるのです。それがクリスチャンの特権であり、神を知っているもののすばらしい祝福です。

そして、ダビデは最後にまとめとして非常に大切なことを教えます。

IV. 神の誠実さを覚え続けること 6節

私たちが人生に満足をもって生きるためには、神が約束を破ることのない、誠実な方であることを覚えることです。6節、**「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来ましょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」**ダビデはこれまで神は私の羊飼いであり、主人であると言いました。そのことはダビデに一つの確信を与えました。それは神のすばらしい約束は必ず守られるということです。この6節を通して、ダビデは二つのことを私たちに言います。現在の祝福と未来の約束です。それは常に与えられ決して破られることはないのです。

1. 神の誠実さは現在の祝福の中に表われる

ダビデは神が自分を守ってくださることを確信していました。6節の初めに「まことに」とありますが、これは強調を意味することばですが、「ただ、唯一」とも訳されます。ダビデは言います。「私は敵に追われていました。けれども神によって守られその敵は手を出すことはできません。ただ、もし、他に何か私に迫り来るものがあるとすれば、それは敵ではなくて、神の慈しみと恵みである」と。こ

の「追って来る」ということばは非常に強いことばです。旧約聖書にこのことばは144回出てきます。そして、その中のほとんどが敵を滅ぼすために追いかけるという意味で使われています。追跡する、迫害するという意味です。実際に、エジプト王パロがイスラエルの民を追って出たときに、このことばが使われました。彼らを捕らえてエジプトに連れ帰り、奴隷とするためでした。また、サウル王はダビデを嫌って殺そうと追跡しました。ここでも同じことばが使われているのです。ダビデは言います。私を熱心に追跡するものがあると。けれども、それは私の敵ではない、神の慈しみと恵みであると。「いつくしみ」とは、原文を直訳すると「良い」となります。ありとあらゆる良いことです。これは神の属性の一つでもあります。神は良いことをなす方であり、神は善であるのです。神の定められたあらゆる良いことが私たちの後を追いかけて来るのです。これが神が私たちになしてくださるすばらしい祝福なのです。ダビデはまた、詩篇34：8でこのように言っています。「**主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。**」。預言者エレミヤもこのように言います。エレミヤ3：25「**主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。**」

また、「恵み」が私を追って来るとダビデは言います。この「恵み」ということばは神の契約の愛を表わすことばです。神が結ばれた契約は決して破られることはありません。変わることもない堅固な愛です。この二つのことば「いつくしみ」と「恵み」が表わすのは、変わることもない神の優しさと慰めと、私たちに対するサポートです。これらがいつまでも私を追いかけてくるのです。私たちは嘆き悲しみの中に居続けることはないのです。

2. 未来にも約束が与えられている

「**私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。**」と言います。これは未来のことです。いつの日か必ず、永遠に主とともにいる日がやって来るというのです。最もすばらしいこと、それをダビデは知っていました。それは神と永遠とともにいることです。神と交わりをもち続けること、神と完全な関係をもって神を誉め称え続けることです。ダビデが求めていたことは、単に困難からの解放や、欠けたところを満たしてもらうことではありません。約束してくださったように、あなたとともにいるそのときを、私に与えてくださいということでした。主の家とは場所を指しているわけではありません。建物でもありません。それは神がおられるところです。ヨハネ14：1-3に「**あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。：2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。：3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。**」とあるとおりです。ダビデが求めていたのは、神との交わり、神とともに過ごすその日だったのです。ヘブル11章を見ると、そこに信仰の勇者たちが同じ思いを持っていたことに気付かされます。11：9-10、16「**信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をとともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。：10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。**」：16「**しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。**」。アブラハムとその子孫たちは約束の地で寄留者として生活しました。彼らの土地として与えられた場所ですが、彼らはそこに居住することがなかったのです。しかし、彼らが待ち望んだのは、神が土台を据えられた都だったのです。神がおられるその場所だったのです。ヨハネはその場所のことをこのように説明しています。黙示録21：3-4「**そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、：4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」**」

天では何がもっともすばらしいのでしょうか？それはそこに神がおられることです。ヨハネはそのことを強調しています。何度も「神がともにおられる」と言っています。なぜなら、都においての神との共存、神と変わることもない交わりを持ち続けることこそ、私たち神の民にとってもっともすばらしい祝福だからです。ダビデが待ち望んでいたのはその約束なのです。私たちは愚かです。クリスチャンであっても、この地上において満足が得られると考えているのです。だから、それを求めていろいろなことを追求します。しかし、ダビデは言います。私たちの本当の満足は神との関係にあると。だから、私たちは現在与えられている祝福を覚えなければいけないし、未来において約束されている本当の満足にも目を留めなければいけないのです。私たちがそれをしないとき、心に不満足を感じるのです。この地上においては、天にあるように私たちが完全に満足することはないのです。なぜなら、私たちは罪を持っているからです。では、この地上において神によって満たされた満足ある生涯を送るために、何をしなければいけないのか、この与えられた祝福に目を留めなければいけないのです。ダビデは詩篇27：4でこのように言います。「**私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住む**

ことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」。ダビデは一つのことをいつも思っていました。あなたとともにある場所にどうぞ私を導いてくださいと。

神は約束を破られません。誠実な方がこの約束を私たちに与えてくださっているのです。神は私たちと契約を結ばれたのです。「あなたを贖い、あなたに祝福を与える」と。人生の多くのときに、私たちはなぜこのようなことが起こるのか分からない状況があります。私たちの住んでいるこの世界は私たちに安心を与えることができません。一時的な満足があってもそれは空しいものです。ダビデはこの詩篇23篇を通して、私たちがどのようなときにあっても、完全な充実感と満足をもって生きることができるのだと教えるのです。パウロは私は満足の秘訣を知っていると仰いました。ダビデは言います。主が私の羊飼いである、主が私の主人である、そのことを私がしっかり覚えて行くことだと。皆さんはダビデと同じように言うことができるでしょうか？私には乏しいことはありません、私は恐れることはありません、と。

この詩篇の1節と6節の「主」は太字になっています。それは主の名が使われているからです。それはまるでサンドイッチのように、この二つの「主」の間にあることが、ダビデが言いたかったことなのです。私たちが満足を得るためには、主を知らなければいけません。人生に喜びをもって生きるためには主との関係をもっていなければいけないのです。この詩篇を学び終えるにあたって私たちが考えなければいけないこと、それは私たちに満足を与えることのできる神と私たちがしっかりした関係をもっているかどうかです。もし、主を知ることがなければ、主と和解することがなければ、罪をさばかれなければいけないそのような中にあるなら、私たちには満足は決してありません。だからどうぞ、本当の満足を与えようとしているこの神を知ってください。また、もし私はこの主を知っているというなら、その神がどのような方であり、どのようなことを私たちにしようとされているのかを知ることです。神は不変の方で、神がご自分の民になさろうとしていることは変わることがありません。ダビデに対してすばらしいわざをなしてくださった神は、私たちにも同じようにされます。なぜそのことを感じないのか？神を正しく理解していないからです。神の導きに信頼を置かず、神の守りを拒み、神が約束を守られるすばらしい方であることを私たちが忘れていたからです。

ダビデが教えた満足の秘訣、パウロがいう満足の秘訣、それをしっかり心に刻んで行きましょう。人生は困難に満ち、厳しいものですが、その中でこの満足の秘訣を身に着けているなら、いつも喜び、絶えず感謝して生きることができるのです。パウロはこのように言います。Ⅱコリント4：17-18「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。：18 私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」と。そのような歩みを主は喜んでくださり、私たちの周りの人たちは私たちを導いておられる主を知るようになるでしょう。